

## To Grow as a Community of Jesus Movement

イエス運動の共同体として成長するために

### 牧会指針

1. 教会は建物ではなく、ナザレのイエスが始められた運動を引き継ぎ、神の国を指し示す共同体。
2. 宣教共同体としての教会のすべては、Jesus Movementの「活動員」(activists)を生み、育てることにかかっている。
3. 牧師中心、司祭中心の教会は、必ず衰退する。
4. 信徒の役割を極力小さくし、牧師中心で進む教会に成長の可能性はない。
5. 教会の中に、「これを私たちの宣教の働きとしてやろう」という、コミットメントのある信徒を3人見つけられれば、基本的に何でもできる。

### I. アバディーンでの経験

- ◆ アバディーン・オークニー諸島教区は、教会数41の小さな教区。
- ◆ St Margaret of Scotlandというウルトラ・ハイで超アングロ・カトリックの教会から、自前の聖堂を持たないカフェ教会まで、教会のカラーは様々。
- ◆ 礼拝の仕方も、宣教のヴィジョンも、教会ごとに大きく異なる。
- ◆ 私たち家族が3年3ヶ月を過ごした St Ninian's Church (聖ニニアン教会) は、アバディーン大学から歩いて10分ほどのところにある小さな教会。
- ◆ アバディーンはグラスゴーやエディンバラに比べれば、非常に小さな都市だが、3年3ヶ月間奉仕をした聖ニニアン教会で、30を超える国の人々と出会うことになった。
- ◆ アバディーン・オークニー教区の主教座聖堂もやはり多民族共同体で、会衆の多数を占めるのはブリティッシュではなかったし、主教座聖堂の牧師はバングラデッシュの人だった（多民族化コミュニティーとしての教会）
- ◆ St Ninian's 2014年の8月から1年以上に渡り無牧となり、その間は、信徒たちが中心となって主日礼拝のやり繰りをした。
- ◆ 信徒奉事者二人と私の3人で勧話の担当をし、空いている司祭が見つけれないときには、Reserved communion や「み言葉の礼拝」を行った。
- ◆ 無牧の間に教会は順調に成長し、私たち家族が加わった時には20人満たなかった礼拝出席者数が、新任牧師を迎える頃にはほぼ倍になっていた。
- ◆ 一緒に無牧時代の教会生活を支えた信徒の一人のJennyは、その後、アバディーン大学の研究職を退いて、教役者となる道を選んだ。
- エディンバラでトレーニングを受けた後、再びアバディーンに戻り、現在はニニアン教会からほど近い聖ヨハネ教会で働いている。

- Jenny によれば、St Ninian'sで私の按手式が行われたことが、自分も按手を受けた奉仕職として働きたいと思うようになる大きなきっかけとなったとのこと。
- イングランドから来てアバディーン大学の博士課程に在籍していた Gioia Barnbrook という学生も、共にSt Ninian's で教会生活をし、PhDを終えた後、ケンブリッジのWest Cott House (Church of Englandの認可神学校の一つ)に進み、今年卒業して、6月から執事としてGloucesterの教会で働いている。
- ◆ その時の経験も、教会が成長する鍵は、教会のミニストリーにコミットメントのある信徒が握っていることを示している。
- ◆ 一つ一つの教会のカラーが大きく異なるので、「誰でもいいから司祭を送れば教会が回る」などということはない。牧師の人選は教会委員会が担う。
- ◆ 牧師招聘のプロセスは、スコットランドでも、イングランドでも、基本的には同じで、
  - 教会で牧師や副牧師の欠員が出ると、公募を出して教会のプロフィールや宣教ヴィジョン、どのような人材を求めているかを公示する。
  - 応募者の書類審査後、教会委員会やメンバーとの面接が行われ、礼拝で実際に司式・説教をしてもらうこともある。
  - 教会委員会が招聘希望者を指名すると、主教がその人物と面接をし、主教による任命式 (installation) を経て、正式に牧師となる。

## II. 聖マーガレット教会（の信徒の働き？）

### 1) ひつじカフェ

- ◆ 2017年にワーキング・グループを立ち上げ、「どのようにしたら、新しい人を教会に招きやすい環境を整えることができるか」を考え、話し合いを重ねた。
  - ワーキング・グループに牧師も参加しているが、牧師の主導によって、何をするかが決めたわけではない。
    - ✧ 1回限りのイベントものはダメ。
    - ✧ 継続的に続けられるもの
    - ✧ やる側も楽しいもの
    - ✧ 新しく来られる方と、教会のメンバーが、顔と顔とを合わせて話せるような何か
- ◆ 話し合いを経て、2018年3月から、毎月第2金曜日にオープン
  - この働きを通して、普段ほとんど教会に来られることのない方や、教会にまったく来たことのない方がマーガレット教会に足を踏み入れるようになった。
- ◆ 2020年2月以降、コロナ禍のためにひつじカフェ休止
- ◆ 2023年5月21日（日）3年半ぶりにひつじカフェ再開
  - 会場設営や料理の仕込みを木曜日に行い、金曜日の午後から开店準備を始めて6時から9時までオープンするスタイルは時間的にも体力的にも負担

が重く、奉仕者の確保が難しくなった。

- 1) 奉仕者を確保しやすい、2) 近隣の方々を招きやすい、3) 主日の午後に食事を提供することにつながるということで、（原則第2）日曜日の午後にひつじカフェの開催日を移動。

## 2) ユース

### a) ユース聖餐式時代

- ◆ 「ユース聖餐式」は、中学生と高校生の子どもを持つ親たちから、「このままだったら、子どもたちは教会に来なくなる」との相談を受けて、2018年1月から始まった。
- ◆ 毎月第2、第4日曜日にユース聖餐式として開始。
  - 第1部の聖餐式が終わった後に、第2部として小グループに分かれて分かち合い（週ごとにトピックが異なる）の時を持ち、互いのために祈って終わる2時間コース。
  - 当初の参加者は15人前後（中学生から35歳以下までが「ユース世代」、それ以上は「シニア・サポーター」）
- ◆ ユースの位置付けは、「若い世代への宣教と育成」。
- ◆ ユース聖餐式の終了時刻は毎回19時過ぎで、シニア・サポーターにとって、帰宅後に食事の支度をするのが苦痛になった。
  - 自然な流れで、ユース聖餐式は晩御飯まで含むプログラムとなり、以後、共に食卓を囲む夕食の時間は、「欠かせないもの」となった。
- ◆ 2019年からは、第5日曜日にも行われるようになった。
- ◆ 順調に参加者が増えていったが、2020年に始まったコロナ禍で、中止を余儀なくされた。
- ◆ 2022年9月から、ユース聖餐式再開

### b) アガペー・ミールへの移行

- ◆ 聖マーガレット教会のユースは、年齢も、国籍も、置かれている社会的状況も大きく異なる、多様性に満ちたコミュニティとなっていた。
- ◆ コロナ禍後にユース聖餐式に現れ、レギュラー・メンバーとなった「そうちゃん」の存在が、ユース礼拝のあり方を再考する大きなきっかけとなった。
  - 毎回、陪餐のときに、洗礼を受けていない「そうちゃん」に疎外感を与えることになり、その状況が他のメンバーたちにとっても辛かった。
  - 「このままでは、若い世代への宣教と育成を目的としたユースのあり方として相応しくないのではないか」という思いも強くなった。
- ◆ ユース礼拝をアガペー・ミールに移行することを決断し、英語圏の式文をいくつか参考にしながら、新しい式文を作成（教区主教による確認・認可済み）。
- ◆ 2024年5月12日からアガペー・ミール開始。

### c) ユース聖餐式とアガペー・ミールとの違い

- ◆ アガペー・ミールであれば、洗礼を受けているか受けていないかに関わりなく、参加者全員が一緒に食することができる。
- ◆ 聖餐式であれば司式は司祭しかできないが、アガペー・ミールであれば、ユースのメンバーが司式をし、礼拝を進めることができる。
- ◆ 現状
  - 毎回平均、20人から25人の出席（シニアが約1/3）。
  - 8/25(日)の中高生ご招待ユースBBQには、50人が参加。
- ◆ ユース世代は変化が早い。
- ◆ ユース世代の3年後はわからない。
- ◆ 食事準備のアレンジや、小グループでのディスカッションのときに全体に目配りをしてくれるシニアのメンバーが必要不可欠。
- ◆ 時間とエネルギー献げてくれるシニア・メンバーによって、ユースの働きは可能となっている。
- ◆ 高齢の教会員の方たちが、若い人たちの存在を喜び、食材を献品してくれたりもする。

### 3) 信徒が担っているその他の働き

- ◆ フード・パントリー
- ◆ オンラインによる祈り
- ◆ 聖書を読む会（月に1回）
- ◆ 家庭集会
- ◆ ナザレの会（?）
- ◆ ホームページ、ブログ、インスタ、Facebookでの情報発信
  - 広報の軸足をネットに移行
  - 駅の看板広告は廃止

上記のものはすべて、牧師のアンテナに引っかかっているけれども、コントロールしてはいない。

Team Ministry について語る上で、2014年に Church of England から出された成長と衰退に関するレポート、*From Anecdote to Evidence* は参照されているか？